週　報
こひつじ
第41巻　47号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

種蒔きのたとえ

その三　道ばたに落ちた種

そこでイエスは、いくつかの土地を取り上げ、なぜそれらの土地が実を結ばなかったかについて語られた。

第一は道ばたである。イエスは言われた。

「道ばたに落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたが、あとから悪魔が来て、彼らが信じて救われることのないように、その人たちの心から、みことばを持ち去ってしまうのです」

聖書を読んでも、説教を聞いても、みことばが心に響いてこない。感動がない。そういう心の状態になるときが、私にもある。

心が固くて、みことばをはねつける。それでは、イエスが来て、語られても、

「笛を吹いてやっても、君たちは踊らなかった」（マタイ一一の一七）

という結果になるだろう。

みことばに応答できないのは、なぜか。何が欠けているからか。

驚く心である。「おお！」という感嘆詞である。上なるものへの畏敬である。

ダビデは自然を見ることによってそれらのものを得た。彼は言う。

「あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは」（詩篇八の三、四）

ダビデは、壮大な宇宙を見て、自分の罪を知った。自分がどんなに弱く、小さな存在であるかを知った。そして、そんな自分に心を留めてくださる神の愛におののきを感じた。

ダビデだけではない。人はみな上なるものへの畏敬を自然から学ぶのではないだろうか。

評論家の森本哲郎は、サハラ砂漠で空を見上げたとき、圧倒されるような畏敬の念に心が満たされ、思わずこう叫んだと言う。

「どうして自分は人間なのか。なぜ地球があるのか。なぜ宇宙はこんな姿で存在しているのか」

習慣にすっかりそまった日常生活で麻痺していた「驚き」の感覚が、砂漠という特殊な環境で、彼のうちに目覚めたのだろう。ところが東京に戻ると再び驚かなくなってしまった自分に気がついて、彼はそれを悲しく思うのだ。

真理への扉を開くのは、いつも畏敬の念であり、驚きの心なのだと思う。

そして何よりも自然がそれらのものを人にもたらしてくれるのである。

自然法則と道徳法則は同じ著者による一冊の本であるとよく言われる。その著者とは、言うまでもなく天地万物を創造された神である。

人が自然界から神の声を聞くのはそのためだ。

カントも言った。

「私を最も畏敬させるものが二つある。私の上に広がる星空と、私の中にある道徳律である」と。

二宮尊徳は聖書を持たなかったが、神の声を聞くことができた。神のもう一つの書物である自然の声に耳を傾けていたからである。

彼は言う。

「私は、書籍を尊ばず、天地を経文とす」

そしてこう歌う。

「音もなく香もなく常に天地は書かざる経をくりかえしつつ」

日々くりかえし行なわれている大自然の法則のなかに、まことの道は示されていると彼は言うのである。

「大空に虹を見る時、わたしの心は躍る」と歌ったイギリスの詩人ワーズワースも自然への畏敬によって神の声を聞いた人だった。彼は少年の頃を、こう回顧する。

かつて牧場と　森と
小川と　大地と
あらゆる周囲の風景が、
わたしにとって、
天上の光に包まれて
見えた時があった。

自然は、彼にとっては神の声だったのである。彼には神聖な神の声を「山のこだま」にたとえた、こんな歌もある。

かかるこだまを
ときどき遠くから
われらが心の耳はとらえる。
聴け、考えよ、いつくしめ、
それは神の声なのだから。

みことばを受容する心は、このような自然とのかかわりを通して生まれ、育ってゆくのではないだろうか。（続）

今日の礼拝

○礼拝は午前一〇時半から。
○教会学校は午前一〇時半から。
○説教は米村牧師。
○台湾の i61 教会訪問の報告を米村幸子さんと尾頭誠郎さんにやっていただきます。
○i61 教会から大津教会の皆さんのためにたくさんのお菓子がとどいています。礼拝後、テーブルをだして、お茶の時間としますのでぜひお菓子を食べながら、お互いの交わりのときとしてください。

i61 教会を訪ねて

一一月二二日（土）～二四日（月）台湾の台中市にある i61 教会を訪ねました。昨年の七月にケヴィン牧師とスタッフの方たちが大津教会を訪ねてくださったとき、それは互いに心の通う、よい交わりでした。その後、何度も、ケヴィン牧師からお招きをいただいたことから、今回、思い切って訪ねさせていただいたというわけです。

牧師夫妻をはじめ、教会の皆様から大変な歓迎を受け、途方にくれるほどでした。日本の教会を愛し、祈ってくださっているのがよくわかります。

教会は台中市の中心部にある高層ビル（四七階）の七階にあり、二五〇人収容のホールのほか、広いダイニングルームや教会学校の広場や教室など、すべてがモダンなつくりでした。これだけの設備のある教会は少ないと思います。会衆は、ほとんどが三〇代～五〇代のカップルで活気に満ちており、その日の礼拝はほぼ満席でした。

通訳をしてくれた祐希さんは、東京の明治大学で学び、日本に六年間滞在し、今は、味の素の会社で働いているとのことでした。前もって原稿を渡していましたので、その通訳は明瞭で力強いものでした。ただ、私のほうが、日本語をどこで切ってよいかわからず、通訳者を戸惑わせたところがあったようです。でもなんとか礼拝の責任を果たせました。

午後は、昼食のあと質疑応答の時間で、四、五〇人ほどの参加でした。台湾のクリスチャンは人口の一〇％ほどだそうですから、ほぼ日本の一〇倍です。しかし離婚率が高いそうです。そこで質問は、いきおい結婚や家庭に関するものが多かったようです。いろいろと私たち夫婦の失敗談を話すので、ほっとするとか、慰められるというような感想でした。

若い人が多いからでしょうか。英語で答えると、どっと笑う場面がありました。英語のできる人が少なくないのでしょう。

それにしても、この数日間の、もてなしは、想像をはるかに超えるものでした。ともかく親切です。出された料理はどれも、日本人の舌に合っており、実においしかった。

年長者だけでなく、若い世代も親日です。「私のおじいさんは日本語ができました」と誇りに思っている人たちに何人も会いました。

熊本に TSMC がやってきて、こうして台湾の教会との新たな出会いが生まれました。お互いの交流を育てつつ、双方の国民に福音が伝えられたらと思います。